



神納の紙器

松下 博

昨年の秋、鎌倉の近代美術館で、「山鹿市の神納紙器展」という展示が一月にわたって行われた。不便なところなので、熊本のかたは、山鹿市の関係者のかた以外、ほとんど見ておられないと思う。

神納紙器というのは、鎌倉美術館の副館長である土方定一さんの命名で、山鹿燈籠のことである。神納紙器展は土方さんの企画であったが、この美術館は現代絵画の展示のほかに、ときどきおもしろい企画をやる。彫像僧円空の木彫を集めてきて展示したときには、円空ブームを招来した。

山鹿燈籠の展示も幅ひろい活動をしていく鎌倉美術館の、そんな企画の一つであった。ぼくは見てきたが、美術館の一室に、緋の毛氈を敷き、その上に真っ白い紙製の燈籠を並べたさまは、山鹿燈籠や山鹿の大宮神社の燈籠殿で見るとは、また違った趣があった。ひとつは、熊本を離れて郷土の特産物を見る感情もあったが、それより山鹿燈籠が、ひどく新鮮に見えたのである。

ぼくは子供のとき山鹿に住んでいたことがある。山鹿燈籠は、夜ふかししても親父がおこらぬ日であったし、真夏の夜、汗くさい人間が町いっばいに溢れる日でもあった。ぼくには初めての祭りの夜、山鹿燈籠は実物の縮少版を、紙だけでそっくりに作ることで天下一品だ、とぼくに話してくれたおっさんがいた。小さな紙細工に退屈していたが、ぼくもその話をきいて、山鹿燈籠をそんなふうにか、他県の人たちに自慢することにした。

神社の本殿や楼門や、座敷造りの家のミニチュアを、紙だけで精巧にこさえ、それが即物的であればあるほど、燈籠作者のウデは確かだとされる。山鹿市にはいま、そんなウデを持った燈籠作者が十人ばかりおられるようだ。燈籠作者たちは、神造りや座敷造りを作り、金燈籠や、これがとくにすばらしい矢壺を作っておられるが、時にそれ以外の、たとえば熊本城とか、水車小屋とかを作るのである。どれも精巧な出来ばえで、精巧さで言えば、複雑な紙製品で、これほどのものを作る技術は、他県にはそうあるまいと思われる。しかし、人間の手が作りだすもので、技術的に精緻になればなるほど、感動が薄れていく、ということのほかに、山鹿燈籠はひとつ忘れ物をしていく、と言えは不遜であろうか。

たいまつ行事がこの地方で、いつのころから燈籠のかたちをとりはじめたか知らないが、燈籠の清潔な白い紙は、神のものであり、清らかな紙器を神前に供えて、人々は五穀の稔りを願った。神に捧

げる紙器は、一点のしみも見せぬ真つ白い紙でなければならなかった。やがて金箔が加わって、紙器は白地に金の不思議な効果をあげるようになる。紙器デザイナーたちは、かたちを複雑にしていって、ながいあいだ白と金の制限をくずそうとはしなかった。作られるものは、絶対に神に関するもので、以外のものは作られなかった。紙オンリーであったが、飾るときは五穀を周囲に敷いた。拝殿や楼門のミニチュアになり正確なコピーと化していったのは、そのような技術が貴ばれていたのだから当然である。

最近、水車小屋やお城が山鹿燈籠のなかに、赤い色がいかに使われた。いくらか精巧な出来であった。城や水車小屋は神事とは無縁だろう。奉納が忘れられて、実物そっくりの方へ、力が行っているのではないだろうか。もともと、神不在の現代の山鹿燈籠は、それでもいいんだと言われれば、それでおしまいである。昨年、鎌倉で見せてもらった山鹿燈籠を、ぼくは忘れない。まさに神に納める紙器であったし、新しい山鹿燈籠の発見であった。

(熊本日新聞社文化部長)

アメリカの

市民たち

吉崎モト子

交通事故があったのかと思っていたら、実は、新婚夫婦に送る祝儀だとのこと。いかにもアメリカらしく微笑ましかつた。通り過ぎる車、車からのお祝の警笛を受けて、若い夫婦はいかにも嬉しそうだった。私も思わず窓越しに「おめでとう。幸福を祈ります。」と言葉をかけてしまった。二人は嬉しそうに握手を求めた。

(県保母養成所助教授)

民謡偶感

木村 祐章

去年の秋の暮れであった。熊本市内の私の仮寓先へひょっこりと現れたのは東京の日本短波放送の後藤プロデューサーであった。そして予告もなしに携帯マイクを出して熊本の代表民謡「おもやん」と「五木の守り唄」の解説を各三分半づつ、計七分間やれと言われたので、度胸を決めてブツケ本番で録音してもらった。しかし頭に血が逆上し、心臓はどきどきするし、自信はなかった。

その録音は今年一月十七日の午後六時からオン・エアされたが聞き損った。新聞にもちやんと波長が出ており、私のラジオは短波もよく聞けるのだが肝心の波長を間違えて、ダイヤルをぐるぐる廻しているうちに終わってしまったのである。あとで知ったが日本短波は三種類の

わずか七カ月のアメリカ生活ではあったが、ミルウォーキー市での二カ月近いアパート生活が、一番思い出深い。ホテル住まいの旅行者としてではなく、アメリカの市民生活にじかにふれ合い、彼等の生き生きとした姿に接することができたという意味で、私にとって、貴重な経験であったと思っている。

私がミルウォーキー駅に着いたとき、迎えてくれたのは、私の今度の視察旅行の計画を作ってくれたウイلم・ジョーグであった。ウイلمは、早速YWCA宿舎に連れて行ってくれた。一泊四ドル半、チップ不要、それに女ばかりの宿舎であり、私にはうってつけの宿舎。一週間の宿泊費を支払い、部屋に荷物を置いてしばらく彼女と話した。

彼女は、アパートに高校教師をしているマリーと二人で住んでいて、ある社会事業団の監督職にあること、日本に十日間ほど旅行したことなどを話し、私の滞在を有益かつ快適にしたいといつて、一週間のスケジュールを渡してくれた。

翌日、市内の公立小学校をいくつか見学して帰ってくると、ウイلمとマリーがやってきて、二人で何か話し合っていたが、やがて私さえ嫌でなければ、アパートにいるアントネットという友達と同居しないかという。もしそこに住めば、何かと便利だし、宿泊費も安くすむし、早速アントネットを訪ねて交渉しようというわけだ。

アントネットは入浴中だったが、私を

介したかった。しかし時間が許さなかつた。

それにしてもNHKに海外放送があるのはどなたも御存知と思う。私はこれに何本かの台本を書いたが南米やブラジルあたりに向けての放送ではやはり熊本の民謡を紹介する機会を与えられた。またヨーロッパ方面への放送に阿蘇山を主とした熊本の観光紹介をしたこともある。ブラジルやハワイの日本人または日系の老人たちの中には、それ等の放送を聞き涙を流して故国を偲ぶそうである。こんな放送も熊本にいる人たちの知らない電波で、真夜中に行われている。

熊本では代表的な民謡と言えば「五木の守り唄」「おもやん」が第一線であり「キンキラキン」「田原坂」「よへは節」「球磨六調子」「ノンショラ節」「おさや節」「ハイヤ節」などが第二線である。しかしまだ紹介されていないものに立派なものも幾つもあることを忘れないで頂きたい。球磨、人吉の「お岳詣り」「忍び唄」八代地方の「ヨイヤナ節」県下各地の「田植唄」「物揚唄」と教えきれないくらい残っている。それ等を先ず熊本に住む自分たち自身でよく知り、あわよくば日本全国はおろか海外にまで放送することも必要であろう。少しアレンジしたら素晴らしい民謡になった例は「五木の守り唄」であり、お隣の長崎の「島原の守り唄」である。

(ラジオ作家)

そんな歌詞の如何にも海辺の村の子守唄らしいのを五木の守り唄と並行して紹

ある土曜日だった。信号待ちの車が、どれもこれもやかましく警笛を鳴らしている。最初、私は、何のことかわからず、

土曜日には、よく近くの教会で結婚式

があげられた。

朝食は、出勤の早いアンが仕度し、夕食は早く帰る私がついて用意した。時には、日本酒を手に入れて、飲んだりしたこともある。土曜日には「ブレランチ」と称して、朝食兼用の食事を十一時頃すませると、洗濯をしたり掃除をしたりして、午後は買物や見学に出る。

洗濯は一週間分まとめてやるわけだが、これがむしろ楽しいくらいだ。エレベーターで地階へ下り、共同洗濯機に二十五セント入ると三十分ぐらいで脱水されて蓋があく。別の乾燥機に入れ温度を調節して十セントを投入すると約十分で乾いてしまい、アイロンもほとんどいらなくらいである。

ある土曜日だった。信号待ちの車が、どれもこれもやかましく警笛を鳴らしている。最初、私は、何のことかわからず、